ダルマパーラバドラの チベット文法論三十頌註の和訳（下）

稲葉　正就

三　「三十頌註」の科段（下）

3　第六格の語端と相応するものの解説

①　略説……第九偈

②　広説……第一〇偈第一―四句

③　摂義……第一〇偈第五句

4　第三格と荘厳強勢などの解説

①　本来の第三格の解説……第一一偈

②　その付随である荘厳強勢の解説…第一二偈

③　具余の解説……第一三偈

④　開摂の解説……第一四偈

5　第五格と選択摂略などの解説

①　本来の第五格〔の解説〕……第一五偈

②　〔その〕付随である比較選択と摂約の解説……第一六偈

③　呼格の解説……第一七偈

2　選択、強勢、開摂などを説く

1　ni の声の選択、強勢を主として説く……第一八偈

2　daṅ の声の開摂を主として説く……第一九偈

3　de と gaṅ の用い方を説く……第二〇・二一偈

4　所有主の声と否定の声を説く……第二二・二三偈
5　偈頌の解釈の教えを説く……第二四偈
6　添後字がないことの不当を説く……第二五偈
Ⅲ　教えを説いて結論する
1　添後〔字〕を知ることによって通達するであろう……第二六偈
2　通達して領受する方法を説く……第二七偈
3　そのはじめの学ぶ順序を説く……第二八偈
4　学ぶべき時機……第二九偈

四　「三十〔頌〕註」の和訳（下）

〔3　第六格の語端と相応するものの解説〕

第三（第六格の語端と相応するものの解説）の中、〔7b〕略説と広説と摂義の三つ〔に分たれる〕。

〔①　略説〕

〔十添後字〔の後〕に、iが〔附加された助辞が〕相応する法則は、これであると〔知るべきである〕。（第九偈）〕

その第一（略説）は、第六格「関係の声」（ḥbrel baḥi sgra）であって、語の声の末尾の十添後字の各々に、iが附加された格助辞が相応する法則は、これこれであると知るべきである。

〔②　広説〕

〔第一（g）と第二（ṅ）〔の後〕には第一（g）が相応せられ、第三（d）と第五（b）と第十（s）〔の後〕にはkyが結合せられ、第七（ḥ）〔の後〕には第七（ḥ）が〔結合せられ〕、その他のもの（n, m, r, l）〔の後〕にはgyが結合せられ、（第一〇偈第一―四句）〕

第二（広説）は〔次の如くである〕。それらはまた、たとえば、十添後字の中、第一gと第二ṅの二つの語尾を有するものには、添後字の第一g〜iを結合したgiというものが相応せられて、

bdag gi rnam dpyod pad tshal rgyas paḥi gñen /（わが考えは、蓮花の園の〔花が〕開く友〔すなわち太陽の如く〕である。）　gaṅ gi mkhyen brtse ñi maḥi ḥod zer gyis /（太陽の光の如き全知の慈悲者は、）

という如きものと、また添後字の第三dと第五bと第十sが結合した語尾には、kyにiが結合せられたkyiという声が相応せられて、

khyod kyi rgyab kyi g-yas kyi chad /（あなたの背後の右の方）

という如きものと、また添後字の第七 ḥ 字の語尾を有するものには、第七 ḥ 字に i が結合せられた ḥi が相応せられて、

byaṅ chub sems dpaḥi spyod pa（菩薩の行）

という如き現実の ḥ 字の語尾を有するものに〔相応せられる〕。また

deḥi sgra ḥjug paḥi tshul ni /（その声を添接する仕方は）

という場合に、それ（de）と声（sgra）とを添接するときの〔de の〕語尾に ḥ 字が現実になくても、「十添後字〔のいずれか〕が添接せられていない語には結合はない。」[33] と説きたもうた正理によって ḥ の語尾を有するものとして、正しくは〔ḥ を〕持つものとしての語尾にもまた ḥi が相応せられる。

前に説いたより他のもの、すなわち n, m, r, l という語尾を有するものにはgy に〔8a〕i が結合せられた gyi というものが相応せられて、

don gyi tshul /（実義の方規）　gtam gyi gshi /（論事）　çar gyi phyogs /（東の方）　dpal gyi bdag po /（吉祥の主）

という如きものと、ここに〔トンミが〕現に説いていないが、偈頌の韻を満すとき単独の文字や添後字（mthaḥ rten）が現実にない語尾に、y に i を結合したものが見られて、

rnam grol ḥbras bu ḥtshal ba yi /（解脱の果を求めるものには）

といい、また

ḥdas paḥi saṅs rgyas rnam daṅ phyogs bcu yi /（過去の諸仏と十方の）

など〔用例が〕多くある。

〔③　摂義〕

〔これらに i が結合せられたものが、「関係の声」（ḥbrel baḥi sa）である。（第一〇偈第五句）〕

第三（摂義）は、このように gi と kyi と gyi と ḥi と yi というこれらは第六格であって関係の声を明らかにするものである。添後字の各々の語尾に、各自の声と一致する文字などに i が結合せられたものが、第六「関係の声」であると説かれたのである。

〔4　第三格と荘厳強勢などの解説〕

第四（第三格と荘厳強勢などの解説）の中、本来の第三格の解説。その付随である荘厳強勢の解説。[34] 具余の解説。開摂の解説との四つ〔に分たれる〕。

〔①　本来の第三格の解説〕

〔それに第十（s）が結合せられたものは、「作具格」（byed pa po；作者と作具の意）であると知るべきである。（第一一偈）〕

その第一（本来の第三格の解説）は、すぐ前に説いた gi, kyi, gyi, ḥi, yi というそれら五つの声に、第十添後字 s 字が結合せられたものは、第三格「作具格」であると知るべきである。例えば、

ḥdi skad bdag gis thos pa（このように我によって聞かれた。このように我は聞いた。如是我聞。）

といい、また

gaṅ gis mtshon te mtshan ñid du（何によって表わされて幾ばくの相があるか。）

といい、また

khyod kyis srog chags gsad mi bya（汝は生きものを殺すべからず）

といい、また

ḥkhor ba la ni rgyab kyis phyogs（輪廻を背によって転ずる。輪廻を断ずる。）

といい、また

saṅs rgyas kyis gsuṅs（仏によって説かれた。仏が説きたもうた。）

という如きものとである。また、ḥi の末尾に s を〔8b〕結合したもの

byaṅ chub sems dpaḥ-his /（菩薩によって）　de-ḥis（それによって）　ḥdi-ḥis（これによって）

という如きものは、この（助辞の）本来〔のあり方〕を示すものであって、そのようならば〔この助辞の〕用い方も同じであるけれども、新訳語（skad gsar bcad）では

byaṅ chub sems dpas /（菩薩によって）　des（それによって）　ḥdis（これによって）

という。

〔以上〕これらによって「作具格」などが明らかになる。

yi に s を結合したものは、

mdzaḥ bo gñis skyes ḥdi yis ni /（友としてのこの婆羅門によって、）

云々の如きものと、gyi に s を結合したものは、

kun gyis go bar bya phyir bçad /（すべてによって理解せられるために説いた。）

といい、また

gtam gyis bsñad（ことばで話した。話をした。）

といい、また

gsor gyis phug（錐によって穴をあける。）

といい、また

zil gyis mnan（威光によって圧服される。）

という如くである。

また経の中に、

mig gis[35] ḥdus te reg paḥi rkyen gyis[36] tshor ba（眼によって積集されて触の縁によって受が〔生ずる〕。）

云々と、

zil gyis mnan（威光によって圧服される。）

というのと、

rab ḥbyor gyis gsol ba（須菩提は申し上げた。）

云々。〔添[37]後字の〕n, r, l の語尾に kyi〔や kyis〕を結合したもの〔があるが、それ〕は d 強勢の声である力によってなされたのである。これもまた多く教説の中にあるから、詳細に考察すべきである。

タクトン[38]（Stag ston）は、〔添後字の〕d, b, s の三つの語尾には〔kyi や kyis をとるが〕、例外として gyi〔や gyis〕をとる例を説明して、

khrus gyis /（洗浄せよ。）　bag yod gyis /（不放逸なれ。）　gsol gdab gyis /（誓願せよ。）

という如きものを説いているのは、格[39]のはたらき〔の助辞〕と普通の語とを区別しない説であって、このgyisというのは kuru という〔サンスクリット語〕を翻訳した語であるが、第三格の分（助辞）ではないからである。

〔② その付随である荘厳強勢の解説〕

〔「関係の声」の〕ali（母音）が取り除かれて第二（i）が結合せられたもの

〔それは〕〔一致と不一致との〕二つの「荘厳」（tshig rgyan）と「聚合」（sdud pa）となる。（第一二偈）〕

第二（その付随である荘厳強勢の解説）は、前[40]（第一〇偈）に「関係の声」として説かれた kyi と ḥi と yi から ali すなわち母音 i 字が取り除かれて、ky, ḥ, y と〔ʔa〕なったものに、添後字の第二 n 字が結合せられて、kyaṅ, ḥaṅ, yaṅ となるもの〔それ〕は、

smra ba bcad kyaṅ sred pa ḥchad /（言語を断じ更に渇愛を断ずる。）

という如き二つの「荘厳」[41]と、

de las lha ni sṅon duḥaṅ ḥjug /（その中、五つは前くも添接する。）（前掲第五偈参照）

という如き「聚合」と、

rgyal ba de dag la yaṅ mchod par bgyi（かれら勝者に対してはすべて敬まうべきである。）

という如きものであって、[41] yaṅ と ḥaṅ は偈の字数が満ちているとき ḥaṅ であり、満ちていないとき yaṅ となる。「荘厳」と「聚合」とは理の如くである。

〔③　具余の解説〕

〔la〔と同じ〕義の su において u が取り除かれ、それに第三〔群〕の第一（t）が結合せられ

それに ali（母音）の第三（e）が結合せられたもの、

それは「具余」（lhag dan bcas pa）である。（第一三偈）〕

第三（具余の解説）は、前（第八偈）に説いた la と同義の su 字において母音 u が取り除かれ、それに第三群〔すなわち〕t 群の第一 t が結合せられ st となり、それに母音 ali の第三 e が結合せられて ste となったもの、それは説かれるべき義が未だ了らないことを示すもの、「具余」の声である。

これについての例示を、摂略した偈に〔まとめると〕、

〔添後字の〕g, ṅ, b, m, ḥ と

〔基字〕単独で無端のものは ste を、

〔添後字の〕d の語尾には de を、d 強勢（d 再添後字）と

〔添後字の〕s, n, r, l の語尾には te を〔添接する〕。

と把握して、具余の声は添後字によって te と de と ste の三つがあると決定し、また次第の如くである。添後〔字の〕g, ṅ, b, m と、ḥ 字が現実にあるものと、語尾の文字が単一なるものと、語尾に〔ḥ〕字を現実に書かないから無いように見えるものと、すなわちこれらは語尾に ste をとる。例えば、

rtag ste〔9b〕[42] ḥjig pa med paḥi phyir（常にして、壊なきが故に。）

といい、また

ḥjig ciṅ ḥbyuṅ ste byas paḥi phyir（生滅す。すなわち所作性なるが故に。）

といい、また

[43] rgyas btab ste（印鑑を押して）

といい、また

ḥdi ni mthoṅ baḥi lam ste（これは見道であって）

といい、また

de ni byaṅ chub sems dpaḥ ste（彼は菩薩であって）

といい、また

dpag bsam çiṅ can rgyas pa ste（如意樹が大きくなって）

といい、また

çar la sogs bcu ste（東〔方〕などの十〔方〕があって）

という如きものと、〔添後字の〕d字の語尾に de をとり、

ḥdi ltar bçad de（このように説いて、）

といい、また

ḥdi lta bu shig yod de（このようなものがあって、）

といい、また

the tshom bcad de（疑いを断じて、）

云々。また、d強勢（d再添後字）と〔添後字の〕s, n, r, l の語尾には te のみをとり、

der phyin te（そこに到達して、phyind te）

といい、また

de ltar gyur te（そのようになって、gyurd te）

といい、また

bkaḥ stsal te（仰せられて、いわれて、stsald te）

といい、また

sans rgyas te /（覚って、）　shes te /（といって、）

yin te /（であって、）　ḥon te（もし）

といい、また

ḥbyun bar ḥgyur te /（生ずることになって、）　bdal te（撒布して、拡げて、）

というなど〔用例が〕多い。

これら（ste, de, te）にはまた具余（余義あるもの）であって、〔意味を〕成就する後句を引発する如きものと、〔前後の〕句[14]の接続（ḥjog ḥtshams）と、偈の〔韻が足らないときに〕補うもの（kha skoṅ）の如きも見られて、

dpag bsam çiṅ can rgyas pa ste[15] /（如意樹が大きくなって、）

という如きものなどである。

〔④　開摂の解説〕

〔十添後字に

第六(m)が結合せられるならば「開摂」(ḥbyed sdud)

である。（第一四偈）〕

第四（開摂の解説）は、十添後字に添後の第六字m字が結合せられるならば、開（ḥbyed pa）と摂（sdud pa）などとして理の如く用いるのである。「開」とは、

de la ḥbyuṅ po ni / ça za ḥam / smyo byed dam / grib gnon nam / srin po ḥam（そこに鬼類は、食肉鬼あるいは、顛鬼あるいは、魔鬼あるいは、羅刹あるいは、）

という如くであり、また「摂」とは、

lha ḥam / mi ḥam / lha ma yin nam / dud ḥgro ḥam sems can du gtogs pa de dag thams cad kyis

（天あるいは、人あるいは、阿修羅あるいは、畜生あるいは、衆生に属するかれらすべてによって、）

〔10a〕という如くである。また

ḥdi rtag gam mi rtag（これは常であるのか、無常であるのか。）

という如き「質問」（dri ba）と「疑問」（the tshom）にも用い、

rigs kyi bu ḥam / rigs kyi bu mo（善男子あるいは善女人。）

という如きは、〔善男子か善女人の〕何れをも「聚合」（bsdu ba）考察し、あるいは〔何れかの〕「選択を有するもの」（gdam ṅa can）としても用いる。

〔5　第五格と「選択摂約」などの解説〕

第五（第五格と「選択摂約」などの解説）の中、本来の第五格〔の解説〕と、〔その〕付随である「比較選択」と「摂約」の解説と、呼格の解説との三つ〔に分たれる〕。

〔①　本来の第五格の解説〕

〔十添後字の

第四（n）と第九（1）とに第十（s）が

結合せられたものは「従格（根源）の声」（ḥbyuṅ khuṅs kyi sa）であって、（第一五偈）〕

その第一（本来の第五格の解説）は、後に添接する十字の第四n字と第九1字とに第十s字が結合せられた nas と las というものは第五格「従格（根源）の声」を表わすものであって、

ɣar nas ñi ma ḥchar /（東から太陽が現れる。）　naṅ nas nor /（内から宝が〔現れる〕。）　rgyu las ḥbras bu（因から果が〔生ずる〕。）

など〔用例〕が多くある。

〔②　その付随である「比較選択」と「摂約」の解説〕

〔「比較選択」（dgar ba）と「摂約」（sdud pa）と〔の義も〕また同様である。（第一六偶）〕

第二（その付随である「比較選択」と「摂約」の解説）は、種類と事物と功徳などのすべての中から別に「比較選択」する。

lha yi naṅ nas tshaṅs pa daṅ /（天の中に梵があって）

mi yi naṅ nas bram ze ñid /（人の中に婆羅門がある。）

という如きものと、

skye bo rnams las rgyal rigs dpaḥ /（人々の中で王族は勇敢である。）

bud med rnams[47] las sṅo bsaṅs mdzas /（女たちの中で青衣の者は美しい。）

という如きものと、「摂約」と〔の義においても〕また同様に用いて、

gzugs nas rnam mkhyen gyi bar /（色より乃至全知（仏）に至るまで）

など極めて多く、具余[48]にも見られて、

phyag ṭtshal nas bçad par byaṅ /（礼拝してから説こう。）

という如きものと、前後の接続においても〔用いられて、

de nas（それより、次に、爾時、）

という。

〔③　呼格の解説〕

〔いずれか或る語をあらわす最初に kye が結合せられたものは「呼掛け」である。（第一七偈）〕

第三（呼格の解説）は、いずれか或る語をあらわす〔10b〕最初に「kye という声が結合せられたものは、語の中「呼掛けの格」であると知るべきであって、

kye rgyal baḥi sras dag /（おお、勝者の子（仏子）たちよ。）

という如くであって理解し易い。

〔2　選択、強勢、開摂などを説く〕

第二（選択、強勢、開摂などを説く）の中、ni の声の選択、強勢を主として説く。daṅ の声の開摂を主として説く。de と gaṅ の用い方を説く。所有主の声と否定の声を説く。偈頌の解釈の教えを説く。添後字がないことの不当を説くとの六つがある。

〔1　ni の声の選択、強勢を主として説く〕

〔いずれか或る語の末尾に一様に結合せられ得るもので、第四（n）に i が結合せられたもの、〔それは〕「選択」（dgar）と「強勢」（bsnaṅ）の助辞となる。（第一八偈）〕

その第一（ni の声の選択、強勢を主として説く）は、いずれか或る語云々は根本三十[49]〔頌〕の偈頌であって、いずれか或る語の末尾に一様に結合せられ得るもので、添後字の第四 n 字に母音 i が結合せられたもの ni というこの声は、多くの中より把握することによって「選択」し、またその対象の特殊性・一般性・所作・能作の多くを把握することによって確言し「強勢」して表現する助辞となる。例えば、

lhaḥi tshogs ḥdi dag las gdoṅ bshi pa ḥdi ni tshaṅs

paḥo / (これら天の集りの中で、かの四つの頭を有するものは梵天である。) lag pa bshi pa ḥdi ni khyab ḥjug go / (かの四つの手を有するものは Viṣṇu である。)

mig stoṅ yod pa ḥdi ni brgya byin no / (かの千の眼を有するものは帝釈である。) mgrin pa sṅon po ḥdi ni dbaṅ phyug go / (かの青い頸を有するものは自在天である。)

という如き声は「選択」の助辞である。サンスクリット語における hi と tu というのを翻訳したものである。

「強勢」は、

bcom ldan ḥdas chos thams cad ni thugs su chud / (世尊によって一切法こそ理解せられた。) chos kyi ḥkhor lo ni rab tu bskor / (法輪をこそ転じた。)

slob maḥi tshogs çin tu dul ba mthaḥ yas pa ni mṅaḥ / (弟子の衆会は無量の教化をこそ有する。)

云々の如くである。

〔2 daṅ の声の開摂を主として説く〕

〔いずれか或る語句の中間において、第三(d)に第二(n)が結合せられたもの、それは「摂」(sdud) と「開」(ḥbyed pa) と「因」(rgyu mtshan) と「時」(tshe skabs) と「命令」(gdams ṅag) との五である。(第一九偈)〕

〔11a〕第二 (daṅ の声の開摂を主として説く) は、いずれか或る語の中間において添後字の第三d字に、添後字の第二ṅ字が結合せられて daṅ という声となったそれは前後の句の力によって「摂」ある〔義〕にも用い、

gaṅ daṅ gaṅ yin pa de daṅ de thams cad (彼々である此々は一切に〔摂まる。〕)

という如きものと、

lha daṅ mi daṅ lha ma yin rnams kyi mtho ris so/ (神と人と阿修羅たちは天である。)

という如きものと、「開」く〔義〕にも用い、

phuṅ po la lṅa ste / gzugs daṅ tshor ba daṅ / (蘊に五あって、色と受と……)

云々の daṅ の声である。「因」の〔義〕に用い、例えば、

legs par slob daṅ mkhas par ḥgyur / (よく学ぶと善巧になるだろう。)

といって、学ぶことに因って (bslabs pas) という義を有する。「時間」的位態 (tshe skabs) に用い、時と動作とを一致してあらわして、

ñi ma çar ba daṅ ḥgro / (太陽が昇ると行く。太陽が昇るとき行くでしょう。)

という如きものと、「命令」(gdams ṅag) をあらわす助辞としても、

legs par rab tu ñon la yid la zuṅs shig daṅ / (正しくよく聴いて心に執持せよ。)　　ñon daṅ / (聴け。)

gyis daṅ / (して下さい。)

云々の如きものがあって、以上 daṅ の声の用法は五種である。

〔3　de と gaṅ の用い方を説く〕

〔いずれか或る語の先端において、第三(d)にeが結合せられたもの、〔それは〕「指示」(tha sñad) に関して三〔義〕であり、「状態」(dṅos po) に関して四〔義〕となり、「時」(dus) に関して二〔義〕である。(第二〇偈)〕

第三 (de と gaṅ の用い方を説く) は、いずれか或る語の先端、すなわち先頭に、添後字の第三d字に母音eが結合せられた de ということの声は用い方が多い。〔それは〕「指示」に関して「先の時」(ḥdas pa) と「異門の表現」(rnam graṅs gshan brjod pa 他のシノニムの表現) と「具余」(lhag bcas) との三〔義〕に用いる。

da deḥi tshe deḥi dus na (今、その時その時に、)

という如き「先の時(過去)」〔11b〕と、

mig kyaṅ de yin rig paḥaṅ de ste / (眼もまたそれであり知識もまたそれであって、)　　de ni blo daṅ de çes rab (それは慧でありそれは智である。)

という如き「異門の表現」と、

shabs la btud de spyi bos blaṅ (足下にひざまづいて頂礼する。)

という如き「具余」に用いるからである。

「状態」に関して、「自己所有の状態」(bdag gi dṅos po) と、「他者所有の状態」(gshan gyi dṅos po) と、「隠密の状態」(gsaṅ baḥi dṅos po) と、「真如の状態」(de kho na ñid kyi dṅos po) との四〔義〕となって、例えば

bdag gi de / (わたくしのそれ)　　khyod kyi de / (汝のそれ)　　de sba bar bya / (それは隠されるべきである。)　　de kho na ñid (真如)

といい、また

ḥdiḥaṅ brda sṅon du soṅ ba la brjod pa ñuṅ bas chog pa (これはまた、ことばを先に説いてあるから、少しの表現 de によって足りる。)

また、

gshan gyi gsal bar çes kyis dogs paḥi brjod pa la

mkho ba ñid do ／（他の人々に明らかにわかることを恐れた表現に必要なものである。）

「時」に関して、前に説いた例示の如く「先の時（過去）」と、それのみならず

deḥi dus na ḥkhor los sgyur baḥi rgyal po duṅ shes bya ba ḥbyuṅ bar ḥgyur（その時に転輪王白螺というものが出現するだろう。）

という de 字の如く「未来」にも用いるから、二種の用法である。

以上の如く de というものの用法は、ここに三と四と二の区別があるから、九種である。

しかしながら、「指示」の場合にも「先の時（過去）」があって、〔それを〕繰返しているのではない事由があるのか、あるいは「指示」に関する三より別な一つの異ったものであると考えるべきである。

〔いずれか或る語をあらわす最初において、第一（g）に第二（ṅ）が結合せられたもの〔それは〕「総徧満」（spyi la khyab pa）となる。（第二一偈）〕

いずれか或る語をあらわす最初において、添後字の第一g字に添後字の第二ṅ字が結合せられた gaṅ というのは「総徧満」〔12a〕の声となる。

gaṅ gi daṅ por byaṅ chub thugs bskyed nas/（すべての最初に菩提心を発して）

といい、また

gaṅ daṅ yaṅ dag ldan pas（すべてを正しく有して）

といい、また

gaṅ gi blo gros（すべての慧）

云々と、

gaṅ byas na mi rtag（すべて作られたものには無常がある。）

などは「総徧満」の声であるから、制[53]限には用いない。ここに仏教徒たちの声の用法において、ことば（brda）といいたいこと（brjod ḥdod）とによってのみの意味の面からいって、〔gaṅ は総徧満を意味するから〕如何なる決定もない。

「いいたいことが〔先に〕決定せられている因であるから」[54]

といい、また

「いいたいことに他の人が〔先に〕決定しているから、声はどこにもないのではない。」[53]

と思考の仕方から生じるからである。

〔4　所有主の声と否定の声を説く〕

〔いずれか或る語の終りに、
pu-liṅga の声が無いとき、
それに pu-liṅga が結合せられるならば、
〔それは〕「所有主」（bdag po）の声であると知るべきである。（第二二偈）〕

第四（所有主の声と否定の声を説く）は、いずれか或る語の終りに、puruṣa は男子であって、その ru と ṣa を除いた pu 字もまた人の男性をあらわす声であり、liṅga とは性あるいは相であって、pu-liṅga の声 pa 字の如きものが無い〔とき〕それに pu-liṅga の声が結合せられるならば、それは「所有主」の声であると知るべきであると。例えば、

rta pa（乗馬者）　gser pa（淘金者、金商）
sans rgyas pa（仏教徒）　mu stegs pa（外道、異教徒）　tshoṅ pa（商人）

云々の如きものと、これについて或るものには ba が付けられることも見られる。

kha lo ba（船長、御者）　pho ña ba（使者）
byed pa po（作者）　tshor ba po（受者）

などと、或るものには po 字〔が付けられ〕、すなわち

ral gri can（剣を有するもの）　ḥkhor lo can（車を有するもの）

などと、このように表現するから、

blo ldan（慧を具すもの）　çes ldan（智を具すもの）

などもまた「所有主」の声であると知るべきである。

〔いずれか或る語をあらわす先端に
strī-liṅga（女性）の声が無いとき、
それに strī-liṅga が結合せられるならば、
〔それは〕「否定」のあり方であると知るべきである。（第二三偈）〕

いずれか或る語の先端〔12b〕、すなわち先頭に strī すなわち女人あるいは女〔性〕、liṅga すなわち性、strī-liṅga の声すなわち女性が無い〔とき〕、それに strī-liṅga が結合せられるならば、その声は「否定」のあり方であると知るべきであると。ここに女性は「否定」の声であって、チベット語で ma, med, mi 云々の如くである。否定の声が語頭にあるもの

ma rig pa（無明）、　mi çes pa（無知）、　ma skyes pa（不生）、　mi ḥgags（不滅）、

などと、語尾にあるもの

gzugs med（無色）、　sgra med（無声）、

などの如きものと、

yod min（であるに非ず）、　min（でない）、云々の如きもの、これらは「否定」のあり方であると知るべきである。

〔5　偈頌の解釈の教えを説く〕

〔偈頌〔が作られたとき、〕〔助辞などの〕付加が少し摂約せられているときでも、それは〔付加が摂約せられているのと〕同様に結合せられて〔解釈〕すべきである。（第二四偈）〕

第五（偈頌の解釈の教えを説く）は、教説において偈頌が作られたとき、格助辞や助辞などの付加[56]の声が少し摂約せられているときでも、それは付加[56]が摂約せられているのと同様に結合せられて解釈すべきであるという如くである。

ここに付加[56]と格助辞と前後の助辞の力があって、それらを考えて偈頌を散文に開いて解釈すべきであるという意味である。

〔6　添後字がないことの不当を説く〕

〔添前字が有っても無くても〔いずれでも〕よく、基字が何であっても、二〔字〕の結合であっても、或は三〔字〕の結合であっても、四母音中のいずれかを結合していても、十添後字〔のいずれか或るもの〕が添接せられなければ他の語の結合はあり得ない。（第二五偈）〕

第六（添後字がないことの不当を説く）は語と句の意味を明らかにするために十添後字がなければならない。五添前字のいずれかが有っても無くてもいずれでもよく、基字が何であっても、二〔字〕の結合であっても、或は三〔字〕の結合であってもいずれでもよく、四母音中のいずれかを結合していてもよく、十添後字のいずれか〔13a〕或るものが添接せられなければ、他の語の結合、すなわち十添後字のいずれか或るものが結合していない語の使用が、トンミ自身による綴字の教えの中にあり得ないからである。

〔Ⅲ　教えを説いて結論する〕

第三、教えを説いて結論する中、添後〔字〕を知ることによって通達するであろう。通達して領受する方法を説く。そのはじめの学ぶ順序を説く。学ぶべき時機。その四つのなすべきこと〔がある。〕

〔1　添後〔字〕を知ることによって通達するであろう〕

〔十添後〔字〕の意義を知るならば、書写し読誦し註釈する場合に、結び着く声において障碍はなく、

〔添後字は前後の〕関係において言葉の最上〔の要素〕であろう。

また、添後〔字〕を知る者は、

〔論書の〕意味についての〔分解〕解釈をなして、

〔註釈書を〕見なくても、

〔註釈書の〕意味と同じ用法を知る〔であろう。〕

（第二六偈）

その（四つのなすべきことの）中の第一（添後字を知ることによって通達するであろう）は、十添後〔字〕の意義の用法を通達するように知るならば、教説を文字に書写し、本に作ったものを読誦し、学問を解釈する場合に、添後〔字〕と結合する[56]結び着く声において暗い障碍はなく、語句の意味の関係において言葉である論議に通達する最上〔の要素〕であろう。また添後〔字〕を知る者は、[57]利益としてその教説の意味についての分解解釈をなして、註釈書などを見なくても、意味を分解せる註釈書と同じ語句の用法を知るであろう。

〔2　通達して領受する方法を説く〕

〔添後〔字〕の用法に通達した時は、

聖教の意味と〔添後字の〕用法と

師の教えとの三が合せられて

〔それが〕意味の上に置かれるべきである。（第二七偈）〕

第二（通達して領受する方法を説く）は、そのような通達せる彼の人が添後〔字〕の用法に通達したとき、添後〔字〕の用法に通達せる彼の人は、聖教の意味と、不顛倒なる〔添後字の〕用法、すなわち教説の意味を誤りなく知ることと、彼の人が師の教えを顛倒なく〔13b〕理解するであろうことから、添後〔字〕に通達すること・聖教を宣説することに通達すること・師の教えに通達すること、すなわちそれら三が合せられて心髄の意味の領受の上に置かれるべきである。という〔意味〕である。

〔3　そのはじめの学ぶ順序を説く〕

〔学に努力する人は、

最初に声音について練習すべきである。

添前〔字〕と基字と添後〔字〕の三を

読誦するために学ぶべきである。

添後〔字〕の四つの結合法は、

聴聞し思惟し宣説するために結合せられる。

それらの規定によって、

〔得知せられる〕果のために意味の上に置くべきである。

学ぶべきこの順序によって、
何人も少い努力でしかも
智慧を速かに体得するであろう。
その故に最初にこの〔順序〕をこそ学ぶ〔べきであって〕、
その後に広説をも聴聞し了って、
〔三〕学にしてそれに対して信ぜられる
宗義を諸師から聴聞す〔べきである。〕（第二八偈）

第三（そのはじめの学ぶ順序を説く）は、先に説いたそれらの順序が、学に努力する初学者の人は、最初に悪い声音をkなどについて自分の発声機関から正しく生じたことばとして練習すべきである。その後に、添前〔字〕と基字と添後〔字〕の三を結合して読み、その後、一句の中の文字に摂めて読むべきであって、読み方を広説すれば、尊者ソナムツェモ[58]（Bsod nams rtse mo）が著作した「若者易入」[59]（Byis pa bde blag）の中に説く如くであって、広くその中に見るべきである。それらの順序は正しい読誦のために定んで学ぶべきである。「性入法」の中に説くが如く添後〔字〕の四つの結合法、すなわち、

〔一〕何[60]に添接するか、〔二〕何が添接するか、〔三〕どのように添接するか、〔四〕何のために添接するか。

〔という四つの結合法〕は、よく敬って師に法を聴聞し自ら思惟し他人に宣説するために定んで結合せられる。聴聞などのそれらの規定[61]（三十頌と性入法）によって得知せられる果のために教説の決定が与えられた意味の上に置くべきである。このような学ぶべきこの順序によって、何人も少い努力で〔14a〕しかも智慧を速かに体得するであろう。況んや大なる人においてをや。その理由の故に通達しようと希う者は、最初の時に先に説いた学ぶべきこの順序をこそ学ぶべきであって、それを知った後に文法の書物の広説をも聴聞し了って、三学にしてそれに対して信ぜられる宗義を諸師から聴聞すべきである。という〔意味〕である。

〔4　学ぶべき時機〕

〔師を師として重んじ、
懈怠と散乱とを断ずる。
性質が善良であり浄信に依止せる
かの人は速かに領悟する〔であろう〕。
かの人に対して〔よい〕時機に教示すべきである。
〔かれ〕以外の者は、かれと逆である。（第二九偈）〕

第四（学ぶべき時との四つのなすべきこと）は、初学者が以上のように学ぶとき、驕慢なく師を師として重んじ、懈怠と散乱とを断ずべきである。恒常の勤勇と、性質が善良で

あり浄信であって尊敬と相応した勤勇との二つ〔の勤勇〕に依止せる彼の人は学を速かに領悟するであろう。㊾「余りない功徳は勤勇に随行して」と説くが如くである。このようなすべての人に対して利益となるために〔よい〕時機に教示すべきであって、かれ以外の者は、先に説いたよいことが、かれと逆であるから、しばらく捨ておくべきである。この〔逆の〕人に対しても〔この人が〕真に〔学問を〕求め希うようになれば、〔遅れても〕後によく教えるべきである。

文法論根本三十〔頌〕と名づけるものの註釈が、Sha lu〔寺〕の訳官比丘 Dharma-pāla-bhadra によって整えられて完結した。

吉祥なれ。　祥善が増上せんことを。

註

㉜ 原文に gñis pa が脱落している。

㉝ rjes hjug bcu po ma shugs paḥi min gi sbyor ba med pa　これはトンミの「三十頌」第二五偈第五・六句（この論文二六頁下段一―三行）、すなわち

rjes hjug bcu po ma shugs na / miṅ gshan sbyor ba yod mi srid //

を少し変えて引用したものである。添後字がない語には他の語を結合することはあり得ないという意である。いま de の如き添後字を有しない語（無端語）が使用されているが、それは第九世紀初頃に新訳語制定のときに ḥ という添後字を書くことが廃せられたのであって、正しくは ḥ を有すると考えねばならないから、ḥi を結合するのであると説明する。

㉞ 原文に「具余の解説」が脱落している。第一三偈の解説によって lhag ma daṅ bcas pa bçad pa / があるものと見做した。

㉟ 原文では gi とあるが gis と見做した。

㊱ 原文では gyi とあるが gyis と見做した。

㊲ 上の三例の如く、添後字 n, r, l で終る語には gyis を付加するのが常である。しかし n, r, l に更に d 強勢（d 再添後字）が嘗ては付加せられた語がある。この d は、第九世紀初頃の新訳語時代に入って書かれなくなったが、本来あるべきものであるから、この d 男性は男性 kyi, kyis を引く。例えば dbaṅ bskur[d] kyi（灌頂の）　dbaṅ bskur[d] kyis（灌頂によって）　pha rol[d] kyi（彼岸の）　pha rol[d] kyis（彼岸によって）

㊳ タクトンとは、「韻律宝生」（P. 5903 ; D. 4459）を翻訳した Stag tshaṅ の訳官 Çes rab rin chen（1405――?）を指すのであろう。

㊴ タクトンが例示する gyis は、動詞 byed pa（なす）の雅語である bgyid pa の命令形である。したがってサンスクリット語 √kṛi（なす）の二人称単数の命令形 kuru（汝はなせ。）の訳語になるわけである。ところがこれは動詞であっ

て格助辞ではない。故に第三格助辞の gyis とは全く別なものであるから、タクトンは格助辞と動詞との区別をしていないという意である。

㊵　二つの「荘厳」というのは、ここに明示せられていないが、このダルマパーラバドラの解釈を承け継いでいるチャンキャロルペードルジェ（Lcan skya rol paḥi rdo rje）の著作「三十頌と性入法の意味を短く解釈せる具慧生歓喜」（大谷西蔵文献 12427, 12430）4b, l. 3 には、一致の荘厳（mthun paḥi tshig rgyan）と不一致の荘厳（mi mthun paḥi tshig rgyan）との二つとしているから、おそらくダルマパーラバドラもそう考えていたと考えてよいであろう。　Johannes Schubert: Tibetische Nationalgrammatik, Leipzig, 1937 p. 20, 4b; p. 47 参照。この解釈は後代のシッ註などに承けつがれているが用例の細部は少し異る点があるようである。ところがここのダルマパーラバドラ註はただ一例しか掲げず、これを一致の荘厳（前後の義が一致の意）の用例と見做すならば不一致（前後相反の意）の用例が示されていない。「具慧生歓喜」の中より不一致の一例を引用すると、

rań bshin ńan la yon tan yań che（本性は悪いが、しかし学識は大きい。）

という例がある。あるいはこのような例が脱落したのかもしれない。

㊶　de las… と rgyal ba…　との二つの用例はどちらも「聚合」の意であるが、前者は偈の韻が満ちている場合、後者は満ちていない場合を示している。

㊷　原文には ḥjigs pa（怖畏）とある。

㊸　rgyas=phyag rgyas

㊹　句の接続とは、どういう用法であるのかよくわからない。この註釈より以前の「言語の門武喩」の中に接続の用法が説かれ、それを後代の「シッ註」が承け継いでいる。ここの接続というのもその用法を指すのかもしれない。拙著「チベット語古典文法学」§ 147, 2 参照。

㊺　この ste は偈の韻を満たすために付加したという意。

㊻　原文には yis とあるが、yi と見做した。

㊼　原文には las がない。

㊽　完了的連続体の nas の用法を指すのであろう。拙著「チベット語古典文法学」（初版本）二四一頁（改定版本）二三一頁。

㊾　原文には gsum paḥi とあるが、sum cu paḥi と見做した。

㊿　原文には bar ḥtshams とあるが、bar mtshams と見做した。

(51)　原文には kyi とあるが、ni と見做した。

(52)　原文には ḥjug par とあるが、第二〇偈よりすると ḥgyur par と見做す方がよいのではなかろうか。

(53)　原文には bya brag laḥań ḥjug pa ñid do / とあるが、……la ma ḥjug……と見做した。

(54)　これは Dharmakīrti の Pramāṇa-vārttika-kārikā（量

評釈頌）より引用した偈である（大谷影印北京版 No. 5709, 130巻83—2—8）。量評釈頌には……rgyu yin shiṅ /とあるが、ここには……rgyu yin phyir となっている。ここの意味は本なら本と先に決められてあるもとであるからということであろう。

㊺ この二句も前註の量評釈頌よりの引用偈である（No. 5709, 130巻83—5—4）。量評釈頌には……gaṅ laḥaṅ med ma yin /とあるが、ここには……gaṅ laḥaṅ med pa min /となっている。

㊻ 原文には ḥtshams sbyor とあるが、mtshams〜 の方がよいであろう。

㊼ 原文にはçes pa yi とあるが、〜yis と見做した。

㊽ ソナムツェモ（1142—1182）は、サキャ寺を建立したコンチョクギェーポ（Dkon mchog rgyal po）の孫であり、サキャパンディタ（Sa skya paṇḍita）の伯父に当る。

㊾ 詳しい題名は、「文字の読み方・若者易入」（Yi geḥi bklag thabs byis pa bde blag tu ḥjug pa）と名づけられ、サキャ派全書（Ṅa, 318a—326a）に収録されている。これに対してサキャパンディタの註釈がある（サキャ派全書 Tha, 235b—247a）。拙稿「サキャパンディタの業績における文法学研究の一面」（大谷史学第八号所収）参照。

拙著「チベット語古典文法学」（昭和二九年一〇月発行の初版本三五九頁一七行）の記述とその註③は訂正しなければならない。

㊿ 性入法第一八偈以下に説かれている。この三十頌第二八偈は性入法へ進み行く一種の序言と考えることができる。

(61) 原文には yan lag de dag gis mthu yis ni とあるが、man ṅag de dag gi mthu〜 と見做した。

(62) 出所不明。

凡例

——　三十頌の本偈。

［　］　訳者による補足。原文に本偈を掲げていないが、わかり易くするため補足した。

（　）　訳者による同義の補足。

P.　大谷大学影印北京版西蔵大蔵経総目録。

D.　東北大学デリゲ版西蔵大蔵経総目録。

大谷西蔵文献　大谷大学西蔵文献目録。

東北蔵外　東北大学西蔵撰述仏典目録。

チベット原文は羽田野伯猷教授の筆写ノートをお借りした。末筆ながら厚く謝意を表する。

（本学教授　東洋仏教史学）